

大阪学院大学  
外国語論集

第76号

*Writers on America*に見るアメリカの理念と作家の役割  
..... 山口 修 1

研究ノート

フランス語小話 —ジュネーヴ在勤時代のフランス語学習奮闘記—  
..... 多賀敏行 23

平成 30 年 12 月

大阪学院大学外国語学会



大阪学院大学  
外国語論集  
第76号

平成30年12月

大阪学院大学外国語学会



## *Writers on America* に見るアメリカの理念と作家の役割

山 口 修

### 序

*Writers on America* (2002) は、21世紀早々アメリカが見舞われた9.11の危機に際して、アメリカ国務省によって発行された、15人の作家たちによるエッセイ集である。アメリカ政府公開の文章ということで、青山南は「翼賛的な文章がならんでいるのではないか」(5)懸念したと述べているが、時期を考えれば誰もが同様に感じる思いであろう。しかし実際には、攻撃直後の愛国主義的熱狂がアメリカを包んでいたにもかかわらず、冷静な現状把握とともに多様な意見が述べられ、自由を尊重するアメリカの懐の深さを示すものになっている。公表から20年近く経とうとする現在も *International Information Programs* と題された同省のホームページ上で公開されていることから、このエッセイ集に書かれた内容をアメリカが重視していることがうかがえる。

編集者 George Clack は、エッセイ集作成のきっかけが作家であり外務省職員でもある Mark Jacobs によるものだとし、次のように説明している。

If we were to ask a contemporary group of American poets, novelists, critics, and historians what it means to be an American writer, Jacobs proposed, the results could illuminate in an interesting way certain America [sic] values — freedom, diversity, democracy — that may not be well understood in all parts of the world. (Introduction)<sup>1</sup>

この文章からは、アメリカ建国以来の自由、多様性、民主主義という価値観を確認すると同時に、それが自国以外で十分に理解されていないのはなぜかを問い直そうとする、提案者 Jacobs の意図がうかがえる。

2017年、Donald Trump がアメリカ大統領に就任した。アメリカファーストをスローガンに掲げる彼の言動には、こうした自国を相対化しようとする視点が見られず、自国中心主義の方向へとアメリカを導いているかのようである。また移民への対応は多様性を失わせ、移民国家アメリカを分断しつつあると懸念するアメリカ人も多い。アメリカの行動が世界に大きな影響を与えることを考えるとき、現在も公開され続けている、作家たちが語ったアメリカの価値観、理念とは何かを、今あらためて問い直すことはアメリカの今後を見据える上でも重要だと考える。

Clack は本エッセイ集の特徴として、15人の作家たちの文章にアメリカの多様性が反映されている点を挙げ、中でも移民系作家たちのエッセイに見られる共通点として、執筆動機が幼児期の体験にある点を指摘し、次のように述べる。

For the writer with recent immigrant roots, it seems there are two rites of passage: first, recognizing both one's longing for and differences from the American mainstream, and then discovering the integrity of one's own culture. (Introduction)

二つの文化の中で揺れ動きながらアメリカ的価値観を受容しようと苦悩する作家の姿は、まさに、国民の多様性を重視しつつ、一方で国家として人々を統合していかなければならない矛盾に苦悩するアメリカ自身の姿でもある。では、二つの文化間で葛藤するこれら移民系作家たちは、どのようにその問題を克服しようとしたのだろうか。彼女/彼らがどのようにアメリカ的価値観を形成していったのか、そのプロセスに焦点を当てて考察し、作家たちがアメリカの理想、価値観をどのように考えているのか、またそれらをどのように実現しよう

としているのか明らかにしたい。本論では、特に幼少期に“two rites of passage”を体験し、アメリカを異文化として体験した4人の作家たち、アラブ系の Elmaz Abinader (1954-)、ヒスパニック系の Julia Alvarez (1950-)、ラトヴィア系の Sven Birkerts (1951-)、ユダヤ系の Michael Chabon (1963-) を取り上げる。さらに、エッセイ集の提案者でもある Mark Jacobs (1951-) 自身の異文化理解の方法を参照しながら、多様性と統合で苦悩するアメリカがその理念実現の困難を克服するためには何が必要なのか、そのための作家の役割は何かを考えてみたい。

## 1

そもそもアメリカとはどのような国家なのか。鈴木透は、アメリカは未完成の状態から国家を築き上げていくという「壮大な実験を宿命づけられて出発した実験国家」(5)であり、試行錯誤をしながら完成を目指している国家であると述べる。国家建設のために国民や社会の統合力が働くが、その統合化のベクトルは国内に共通の価値観を作ろうとする一方で、特定の価値観を社会に押しつけようとし、結果、統合化の力が強まれば強まるほど多元化のベクトルが活性化される。この二つの力のぶつかり合いが、アメリカを前進させる推進力になっていると説明する。つまりアメリカには国家建設の前提として、多元化と統合化という二つの力、価値観が存在することになる。奇しくも Clack は“how varied these essays are”、“certain common threads appear among the essays” (Introduction) と、本作にこの二つの特徴を見出しているが、「多元」と「統合」の二項対立はアメリカの宿命といえるだろう。では作家たちはどのようにその問題に取り組んだのだろうか。

Elmaz Abinader のエッセイは “When I was young, my house had a magic door” (9) という一文で始まるが、このドアが幼少期の彼女の世界を二分する。ドアの外側では “darkie”、“a kinky mop”、“ape” (11) といった言葉で、他の女の子たちから違うことをからかわれる一方、ドアの内側では部屋中

が“Arabic bread”(11)のにおいて満たされ、アラブ料理が並び、アラビア語で昔話が語られ、政治談義が繰り広げられる。内側の世界は彼女を“joy and belonging”(14)で満たしてくれた。しかしアラブの価値観が重視される一方で、ドアの内側にあっても、外の世界の視線が彼女の生活の一部には組み込まれていた。もしこの内側の世界が外の世界の人たちに知られたら、“social outcast”(14)となるのではとの恐怖を彼女は取り去れず、家族もそれを強く意識している。

The reputation of our family relied on our perfection and my parents had no idea that their struggling-to-be-perfect daughters digested unsavory ridicule from their peers. (12-13)

外の世界で自分がどのように評価されるかによって、彼女の一族は評価される。子どもたちはこのことをつねに意識し続けなければならない、ドアの内側でも外部の視線からは逃れられないのである。

本エッセイ集の親の世代に移民してきた作家たちに共通して見られるのだが、親は自分たちが生まれ育った国の文化的価値観を子どもに共有することを求める一方、新しいアメリカ的価値観をも身につけるよう求める。そのため子どもたちは、二律背反ともいえる難題を背負わされる。内と外の世界を日々行き来する子どもは、家庭内にもアメリカが抱える問題が縮図として存在していることを自覚せざるを得なかった。Abinaderはこの問題にどのように取り組んだのだろうか。

大学時代の経験が彼女の作家としての方向性を決定づけたようだ。彼女の大学には“Nationality Classrooms”(15)というのがあり、各国の文化的考えが反映されるよう教室がデザインされていた。ここでもアメリカとアラブがドアで分けられていたが、友人とその部屋に入り、アラブ文化を象徴する多くのものを目にした瞬間、彼女にはアラブ文化への誇らしさが湧き起こる。そしてア

ラブ文化と自分とのつながりを友人たちに語り始め、アラブ料理を振る舞い、自分の部屋に招きパーティを開くまでになる。だが大学にはアラブ文学の科目もなく、アラブについて語れば語るほど “my display of my Arab-ness served to exoticize me” (15) と自分の異質性が強調され、社会ではアメリカが必ずしもアラブに対して肯定的ではないことに気づくようになっていく。

ヨーロッパ系男性が書くアメリカ文化をテーマにした文学が外の世界の主流となる中、作家になった彼女は祖父や父母たちが生きた時代を、ドアの内側の世界を書き続けていた。しかし、外の世界で受け入れられたという感覚をもつことはなかった。あるとき、彼女は中国系アメリカ人作家 Maxine Hong Kingston の本から大きな刺激を受ける。

In essence, this writer knew, she knew, what was inside the door and she wrote about it. This book not only led me to the body of literature available in the Chinese-American canon, but I found African-American, Latino, Native American writers, whose voices resounded about some of the same issues: belonging, identity, cultural loneliness, community, and exoticization. (16-17)

Kingston がドアの内側の世界を知り尽くし、様々な民族的、文化的背景の中、アイデンティティや孤独、疎外感という自分と同じ問題を書き続けていることを教えられる。Kingston によって、彼女は自分が作家としてドアの内側の世界を書いてきたことが間違いではなかったと感じたのである。さらに黒人作家 Toni Morrison の影響もあり、Abinader は、“As a writer, I was also an activist. Telling a good story, writing a beautiful poem pierced the reader more deeply than any rhetoric could manage” (17) と、作家の役割を自覚するようになる。

9.11を経験し、ますますアラブ人たちにはつらい時代にあって、作家の役割

は大きくなると彼女は考えている。

I have a new small town. It's not anywhere in particular, or maybe it's everywhere. In this village, people live with their doors open, moving back and forth over the threshold of what has been exclusive to what will some day be inclusive. (18)

この小さな町は、アラブだけでなく、自分のルーツとなる文化とアメリカの二つのアイデンティティに苦悩する様々な移民が住む町である。外の世界を恐れ、ドアを閉ざすのではなく、ドアを開け、それぞれの家を行き来できるようになる時、多くの対立は和らいでいくだろう。作家として内側の世界を描き続けることで、友人とアラブ文化を共有したように、自分たちの世界を他者に知ってもらい共感してもらうことが、作家の役割だと彼女は考えるのである。

この考えは9.11後、アラブ世界で起こる数々の悲劇を前に、フランス人哲学者 Jean-Paul Sartre 同様、文学に何ができるのかと問いかけた岡真理と通じる。岡は次のようにいう。

ジャーナリズムは戦争といった問題が起きてのちはじめて、それらの問題が生起する社会について伝える。だが、大切なのは、そうした出来事すべてに先立って、人々がどのようにその生を営んできたか、何を愛し、何を慈しみ、何を大切に生きてきたか、そうした生の具体的な細部ではないだろうか。それを知らなければ、私たちは、戦争や占領が彼、彼女らからいったい何を奪い、何を破壊したのかを真に知ることもできない。そして、戦争や占領が人間からいったい何を奪い、何を破壊したのかを真に知らないままに唱えられる「反戦」や「平和」は、それがどれだけ正しくても、抽象的なお題目にとどまるだろう。

記号に還元されない、人間が生きる具体的な生の諸相を描き、私たちの

人間的想像力と他者に対する共感を喚起するもの、そのひとつが文学作品であるとすれば、冒頭のサルトルの問いに対する答えのひとつがここにあるのではないか。(12-13)

自分の世界を知ってもらうために自分の世界を描くことが、作家の、文学の役割だというのが岡の答えだが、それは Abinader に通じるものがある。

次にヒスパニック系作家 Julia Alvarez について見ていこう。ドミニカが独裁政権下にあった1960年、彼女が10歳の時、父親の地下活動が明るみになり一家はアメリカへと国外脱出してきた。<sup>2</sup> 当時のことを彼女は次のように書いている。

The minute we landed on American soil we became “spics” who spoke our English with heavy accents, immigrants with no money or prospects. Overnight, we had lost everything, our country, our home, our extended family structure, our language . . . . (22)

自分が異邦人であることを痛感し、故郷を、母語であるスペイン語を失い、移民として戸惑う様子がよくわかる。

彼女もまた Abinader と同じように、両親から二律背反的難問を課される。彼女が育ったドミニカでは、女性の読書や勉強に対して否定的であり、子どもは両親に従順であることが求められていた。

My sisters and I were caught between worlds, value systems, languages, customs. And this was our challenge, which is the challenge for many of us who are immigrants into a new world that is different from the old one of childhood . . . . (23)

“worlds, value systems, languages, customs” といった語が複数形で表現されているところに、彼女が住む世界の複雑さや問題の多さが現れている。このような環境は、彼女のアイデンティティ確立に大きな影響を与えた。彼女によれば当時の社会では、移民はアメリカ社会に同化し過去との結びつきを断つことで、代償としてアメリカ市民権を得るという状況だった。(24) 多くの場合、自分のルーツたる国の文化的価値観をあきらめなければならなかった。彼女は “I had become a hybrid” (24) と述べるが、この “hybrid” はけっしてポジティブな意味ではない。なぜなら “I was not a mainstream American girl and I wasn’t a totally Dominican girl anymore” (24) とあるように、自らのアイデンティティを分裂させる負の “hybrid” だからだ。そのため彼女は帰属感を強く求めるようになる。

その孤独感と帰属願望が彼女を文学の世界へ導いた。彼女は雑誌インタビューで “finding such an unfriendly, unwelcoming world, I was thrown back on my own resources. I became a reader. . . . It seemed a much better world to settle into than the United States of America of 1960” (Alvarez “Interviews”) と答えている。その文学の世界で彼女はアメリカの詩人 Walt Whitman と出会う。Whitman は多様性が主流へと溶け込むことに反対し、“I resist anything better than my own diversity” (25) と歌う。公民権運動を経て、Alvarez は “Freedom was the opportunity to shape a country, to contribute to the ongoing experiment, never tried before, of making out of the many, one nation, indivisible with liberty and justice for all” (26) と認識するに至る。

また Alvarez は、詩人 Langston Hughes から大きな影響を受ける。Hughes は、アフリカ系、ユダヤ系、ネイティブ・アメリカン系の血を引く家系に生まれた。多様性を身に纏った Hughes が “I, too, am America” (28) と歌うとき、Whitman とは異なる、新しいアメリカの歌を彼女は聴いたにちがいない。批評家ケアリー・ネルソンは、Hughes の果たした役割を「黒人に対

する抑圧をアメリカ社会にゆきわたる貧困と差別とに繋ぐべく、数々の努力をした」(ネルスン 1192-3)と評しているが、差別を乗り越え、多様性を当たり前のこととし、自分をアメリカ社会の一員だと主張する Hughes のアメリカの歌の中に、彼女は自分の居場所を得ようとしたのだ。彼女は自分の役割を次のように述べる。

My work as well as my vote contribute [sic] to the richness and diversity of the whole. By our active and committed presence as citizens of different ethnicities, races, traditions, and linguistic backgrounds, we challenge America to expand its understanding and compassion and thus grow stronger as a nation. (29)

彼女も Abinader と同じように、自らのアイデンティティを主張し、それを理解してもらおうと試みているのがわかるだろう。

移民としての疎外感を経験し、マイノリティの側に属するからこそ、彼女はアメリカの理想を重視する。

To create this kind of nation is to present a model of a world where we all belong. But this America can only be achieved if each person is free to be the rich and complex person he or she is. (30)

という彼女の言葉には、理想国家の実現には、自由と多様性が重要だという思いが込められている。それゆえ、彼女は自らを “I am truly an all-American writer” (31) と呼び、

Ay sí,  
(y bilingually):

Yo también soy América

I, too, am America (35)

と、二つの言葉でアメリカを歌い上げるのである。

以上、Abinader と Alvarez の見出した異文化問題を乗り越える方法は、二つの文化を融合し主流へ同化する方法ではなく、自文化の独自性を表現し多様な世界を理解してもらうことで共存する方法であった。そのため彼女たちは自由を重視するのである。

### 3

次に二人の男性作家 Birkerts と Chabon について見ていこう。Birkerts は、ラトヴィアから移民してきたばかりの両親の元に生まれている。両親は家庭ではラトヴィア文化、ラトヴィア語の神聖性を重要視していたが、“cultural preservationists” (40) ではなく、同時代の波に合わせるような人物たちだった。にもかかわらず、彼は “My ruling obsession through all the years of my growing up was to shed every trace of foreignness — otherness — and to become a full-fledged American” (41) と、自分の異質性を意識せずにはいられなかった。その原因は、例えば、言葉であり、自らの名前にあった。両親が大っぴらにラトヴィア語を使うため、彼は、学校ではわざと英語のスラングを使って仲間意識を得ようとする。だが、帰属感を感じることができない。また、“We were strangers from a strange land. My father’s name, not Jack or Ted, was Gunnar, my mother’s, Sylvia. I was, God help me, Sven” (41) と、彼や家族の名前が示す「ラトヴィア」が外の世界との間に壁を作っていた。

大人から見れば些細に思えるものでも、子どもには他者との違いは意識せざるを得ない。彼は友だちと違うことを恥ずかしく思い、ふつうのアメリカ人になるため必死に演技を続ける。このとき彼が求めていたのは、“an easy athletic guy named Bob or Mark, or nicknamed ‘Chip,’ with a normal

crewcut (I was cursed with thick curly hair) and acceptably normal-acting parents” (41) など、いわゆる WASP 的アメリカ人像、価値観であった。

彼は後に、この「アメリカ」は世界中の誰もがもつようなステレオタイプのアメリカ像であり、広告代理店が作りあげた幻想に過ぎないことに気づくのだが、この WASP 的アメリカ人像に少し注意しておきたい。西山隆行は、アメリカで国民融解、再形成を表現する「坩堝」という言葉は、迫害から逃れたエスニック集団にとり一種のユートピア思想だったとし、次のように続けている。

だが、この坩堝の中に入ることが認められるのはヨーロッパ系のエスニック集団のみであって、いわゆる有色人種がそこに加わることは想定されないことが多かった。また、実際のアメリカ社会は、全てのエスニック集団が平等な立場で混ざり合う坩堝ではなく、トマト・スープのようなものだったと言われることも多い。

トマト・スープでは、パセリやセロリなどが風味を増すために加えられることはあっても、いずれはベースのトマトと一体化して原形をとどめなくなってしまう。(21)

「トマト・スープ」論は、WASP の文化的基盤は揺らぐことがなく、いずれはそれに同化するという考え方で、「アングロ順応論とでも呼ぶべきもの」(21) と説明される。先に見た Abinader が “darkie”、“a kinky mop”、“ape” といった言葉で差別され、Alvarez が “spics” とスペイン語訛りの英語をからかわれ、違いを強調された背景には、この「アングロ順応論」があったと考えられる。

Birkerts のアメリカ人像もその影響下にあったが、カウンターカルチャーが興隆し社会の中で違うことが受け入れられ始めると、彼の見方は相対化されていく。例えば、Philip Roth の *Portnoy's Complaint* (1969) の主人公 Alex や

J. D. Salinger の *The Catcher in the Rye* (1951) の主人公 Holden のようなアメリカ人作家たちが創り出した新しい英雄の生き方は彼の価値観を揺さぶり、彼は文学への関心を高めていった。

二十代の終わり、ヨーロッパ文学、特にオーストリアの作家 Robert Musil の作品から、自分の両親や祖先が暮らした地としてのヨーロッパを彼は身近に感じるようになる。その背景には幼き日の体験の積み重ねがあった。彼は “I was, in essence, connecting with the story-world I had grown up with” (49) と述べるが、幼少期に聞かされた昔話や祖父母の生活についての話が彼のアイデンティティの形成に関わっていたことに気づいたのだ。過去を振り返り、“the whole path of my life — writing life included — has been profoundly conditioned, first by the determined rejection, and then the veiled acceptance of my culture of origins” (50) といい、その原動力が “what it means to be American” (50) への強い感情だったことを明らかにしている。少年期の彼が望んだアメリカ的なもの、つまり WASP 的本流に流れ込むには、まず自文化を拒絶しなければならなかった。だが Musil の読書体験から、過去の拒絶ではなく過去とのつながりを意識させられ、Birkerts はアメリカ人であることの意味を新たな方向から発見する。

But, truth be told, it is not formative in the same way; it is laid on top of the other, the visceral. I might wish this otherwise. A different core awareness, a less obsessive investment in these fantasies of WASP normalcy might have made my passage easier, less painful. Alas, intriguing as these surmises can be, they lead us exactly nowhere. We are shaped by what we dream, and there we have no control. (51)

アメリカなるものは、民族性、多様性に関係し、少なからず彼の思想にも影響を与えている。しかし、それらを主張するだけでは発展性がないと彼はいう。

ステレオタイプなアメリカとラトヴィアやヨーロッパ文化の違いを実体験した彼は、この既存の区別を越えた何かを新たに生み出すことが、発展的なものになっていくのではないかと考えている。

小坂井敏晶は異質性の意義について次のように述べる。

多数派の常識と対峙するだけでなく、対立の前提をも乗り越える。異質な考えの衝突から生ずる破壊と再構築の絶え間ない運動。少数派は、その起爆装置だ。自らの変革を通して同時に世界を変えてゆく。そこに少数派の存在意義がある。(43)

Birkerts は作家として、破壊と再構築のための起爆装置の役割を果たそうとしているかのように思われる。

一方、ユダヤ系作家の Chabon は6歳の時、両親が購入した新興住宅地コロンビアでの経験を語る。そこはショッピングモールの発明者といわれる James Rouse が開発したもので、建設経済研究所の「アメリカのニュータウン開発」というレポートには「ラウス社はその当時人気だった、建築又は概観重視のハード中心の開発に幻滅していた。ラウスは代わりに例えば、生涯教育、市民協力、多様な人々の調和といった生活の発展や価値を高めるような実用的なまちづくりを目指した」とあり、コロンビアがまったく新しい価値観の元に作られたことがわかる。引っ越してくる住民たちが自らを“pioneers”と称していると Chabon は書いているが、彼らはこの地を新天地として見なしていた。展示センターには様々な資料図面が公開され、おそらく多くの移住者たち同様、Chabon 一家もその図面に魅せられていた。

The slide show featured smiling children at play, families strolling along wooded paths, couples working their way in paddleboats across Kittamaquundi or its artificial sister, Wilde Lake. It was a bright,

primary-colored world, but the children in it were assiduously black and white. Because that was an integral part of the Columbia idea: that here, in these fields where slaves had once picked tobacco, the noble and extravagant promises that had just been made to black people in the flush of the Civil Rights movement would, at last, be redeemed. (70)

スライドには見事なまでにアメリカの「平等」の理念が示され、帰り際に渡された地図は、地名や道路などは書き込まれているものの、子どもの想像力を刺激するに十分な余白、未知の世界をもった新天地アメリカそのものだった。このような幼少期の経験が、彼のアメリカ人としてのアイデンティティ形成に大きな影響があったのは間違いない。

しかし、彼の理想的な世界は人生において簡単には実現しなかった。両親の離婚、不幸や苦々しい人種関係など、彼が知らない現実が数多く存在した。彼が出た後のコロンビアも、“Columbia had failed in its grand experiment” (75) と噂され、犯罪や人種不安もある、理想とはほど遠い都市になってしまったかのようだ。夢と希望をかきたてられた少年期をここで過ごした Chabon には大きなショックであったであろう。だが、それにもかかわらず、彼はこういう。

The judgments of Columbia's critics may or may not be accurate, but it seems to me, looking back at the city of my and James Rouse's dreams from 30 years on, that just because you have stopped believing in something you once were promised does not mean that the promise itself was a lie. . . . How fortunate I was to be handed, at such an early age, a map to steer by, however provisional, a map furthermore ornamented with a complex nomenclature of allusions drawn from the

poems, novels and stories of mysterious men named Faulkner, Hemingway, Frost, Hawthorne, and Fitzgerald! Those names, that adventure, are with me still, every time I sit down at the keyboard to sail off, clutching some dubious map or other, into *terra incognita*.  
(75)

自分と Rouse 共通の夢、新天地として多様な人々が共存できる都市の完成を彼はあきらめていない。作家の名前が挙げられているのは、彼の人生の方向づけに文学的想像力が役に立ったからだろう。まさに実験国家として、想像力を武器に、失敗にもかかわらず進み続けようとする彼の姿勢が述べられている。

Birkerts と Chabon には幼少期にモデルとなるアメリカ像があったが、現実の社会の中でそれがある種の幻想であることに気づく。だが、彼らは幻滅することなく、“dream”、“*terra incognita*”という言葉が示す世界をあらためて希求する。その原動力が“American Dream”という夢見る力、想像力なのである。

#### 4

エッセイ集の発案者であり海外経験豊富な Mark Jacobs は、自らの経験に基づき異文化理解の方法を本作で提案している。彼は両親が同じアメリカ人でありながら Pennsylvania と Niagara Falls という異なる文化圏の出身であったため、両方の世界を理解することになり、両方の“American idioms” (150) を話すようになった。一方、外交の仕事を通じて、様々な言語や文化に触れ、それぞれの言葉を使うことでその文化に近づき、その一端を理解するという経験もしている。しかし社会の中でそれら複数の文化はぶつかり合い、“one place where the three languages came together seamlessly was a dream” (148) とあるように、互いが共存できるのは彼の夢の中だけだったと、現実の厳しさを述べている。このような経験が、彼が作家になる背景には

あった。

彼は異文化に近づくための極端な例としてポーランド生まれの英国作家 Joseph Conrad の “loss of home and language” (152) という経験を挙げ、作家として自分と異なる世界を理解し描くためには、自分の故郷や言語を捨て去るような深い経験が必要であることを示唆する。Conrad はそうすることで安定した場所を失い、永久に変化し続けることを強いられたが、結果 “cultural relativity” (152) を獲得する。Jacobs によれば、アメリカには建国当初から自分を作りかえることが可能だという考え方があった。古い自分を破壊しなければ新しい自分を入れられないのだが、自分を捨てきれず、結果少し変化しただけということも多い。その点 Conrad は過去とのつながりをすべて断つことで根本的に自分を作りかえ、“cultural relativity” を手に入れたと述べている。

では、Jacobs 自身はどうか。

Peace Corps and the foreign service do not come close to that kind of profound experience of remaking oneself. Every time I left the United States, I figured I was coming back. Although I acquired new ones, I kept my own language. I stayed plugged into my own culture; with today's technology, and the noise it generates, it's harder to unplug than it is to stay connected. . . . I was sometimes humbled and frequently surprised. I wasn't reinvented, but I think it's fair to say I was enlarged. (153)

彼は Conrad のように経験による徹底した自己変革ができていない。なぜなら、アメリカという “home and language” を断ち切れていないからだ。それどころか、彼はアメリカへのつながりを強く意識しつつ、異文化と相対している。だが、まったく変化しなかったわけではない。古い自己と断絶するのではなく、自己拡大したのである。つまり、自文化 / 他文化という対立の中、自

文化を捨てることなく他文化を吸収することで、対立を乗り越える視点を獲得したのだ。

彼の考え方には、最初に触れた経験の影響が大きい。両親の異なる文化を対立させれば家族は安定せず、ひとつの言語のみに特化すればその他の言語を話す文化との交流は行えない。個々の要素を対立させても、自分にとっていい結果にはならない。Conrad のやり方はひとつを失うことでもうひとつを手に入れるというトレードオフの関係にあり、自己拡大できないのである。

アメリカ人として他文化を理解するための方法について、Jacobs は本作の中でふたつの点に言及している。ひとつは、アメリカ人作家の間で、“trying to do imaginative justice to characters who are not American” (156) という動きが出てきていること。もうひとつは “the notion of paying careful attention to a culture not one’s own is even more compelling” (157) とあるように、他文化への注意深い配慮が重視されつつあることだ。また、“to truly appreciate the literature of one’s own culture, it was necessary to know that of another” (157) という19世紀の英国人批評家 Matthew Arnold からの引用も、この「文学」を「文化」に置き換えれば彼自身の主張と重なり、相手を知ることの必要性を重視していることがわかる。

Jacobs が、他文化を書こうとするアメリカ作家には書きたい国の入手可能な資料、文学が多数存在する (157) というとき、他文化理解のための努力の重要性が強調されている。異文化体験は、自分とは何かをあらためて問い直す視点を生む。インタビューで *Writers on America* の着想理由を尋ねられ、“a more nuanced — and therefore more realistic — sense of who we are as a society” (Jacobs “Talking”) と述べるが、まず自分たちが何ものかを知ることの重要性を彼は意識していた。たとえ読書体験であれ、異文化体験は自己を拡大させ、アイデンティティを再確認させる。その結果、夢の中でしか経験できていない満足感 (147) を得ることができるよう、自らを変えていくのである。

## 結論

以上見てきたように、彼女/彼らは幼少期に、ドアの内側の価値観と外側の価値観という、時に矛盾する世界の中で、自らのアイデンティティを形成しなければならなかった。そしてその成長過程で、彼女/彼らは最終的に自らのルーツを断ち切ることはできないことを理解する。あるものはその内側の世界を書くことで外の世界へ自らを開いていこうとすることを自らの役割とし、またあるものは、Clack が “a move beyond their personal experiences and communities — even beyond their Americanness — to a powerful sense of the universal” (Introduction) と述べるように、異文化間の対立を止揚して「普遍的なもの」を創り出そうと努力している。例えば、Chabon の代表作 *Summerland* (2002) は、周りから “a motley crew” (352) と呼ばれるような、人間と大小様々な異種の妖精たちからなる野球チームの話である。勝利によって世界を救うという目標の下、それぞれが欠点をもちながらも団結して戦っていく。主人公の一人 Jennifer T. は母親が “half Scotch-Irish and half German, with some Cherokee in there” (398)、父親は “half Squamish and half Salishan and half junkyard dog” (398) というまさにハイブリッドな少女である。試合では、生物種間の違いなどなんの意味もなく、それがそれぞれの長所として活かされる。多様性ゆえ、チーム内でそれぞれが自己拡大を起こすのである。これはファンタジーという文学の想像力が示すひとつの理想社会である。

Chabon 同様、Jacobs の考え方には、自文化/他文化の二項対立を相対化する視点が示されている。内部に自文化を抱えることの自明性を把握した上で、他文化を尊重し受容することで自己拡大するという考えは、自文化を書き続けることで他者の理解を広げようとする Abinader や Alvarez の姿勢を肯定するとともに、その先をいく考え方でもある。自分を豊かにするために他文化が存在するのだと考えれば、他文化を排斥することがいかに愚かな行為であるのかははっきりするのではないだろうか。このように、アメリカの作家たちは自由、

平等、“American Dream”といったアメリカの理想を希求し、想像力で人々に理想の世界を提示する役割を担っているのである。そしてこの考え方は、アメリカが移民国家として多様性と統合という矛盾を内包しつつ成長していくための一つの方法を示唆しているように思われる。

#### 注

1. 本論の *Writers on America* からの引用はすべて、アメリカ国務省のホームページ (<https://usa.usembassy.de/etexts/writers/index.htm>、Accessed 18 Sept. 2018) で公開されているものに拠った。なお、Introductionを除き、読者の便宜のため青山南訳版の該当ページを記載した。また Whitman、Hughes、Arnold の引用も同サイトによる。
2. 翻訳版では「ドミニカ共和国の生まれ」(20) とあるが Alvarez の公式ホームページには “I was born in New York City during my parents’ first and failed stay in the United States” とあり、生後3ヶ月で両親とともにドミニカに戻ったとある。(<https://www.juliaalvarez.com/about/>、Accessed 18 Sept. 2018参照。)

#### 引用文献

- Alvarez, Julia. “Interviews: In the Name of the Homeland.” *The Atlantic Online*, July 19, 2000. <https://www.theatlantic.com/past/docs/unbound/interviews/ba2000-07-19.htm>. Accessed 7 Sept. 2018.
- Chabon, Michael. *Summerland*. New York: Hyperion Books for Children, 2002.
- Jacobs, Mark. “Talking with Mark Jacobs.” *Peace Corps Writers*, n.d. <http://www.peacecorpswriters.org/pages/2004/0401/prntvrs401/pv401talkjacobs.html>. Accessed 18 Sept. 2018.
- 米国国務省国際情報プログラム局 『私たちはなぜアメリカ人なのか』 青山南

訳 ゆまに書房 2003年

建設経済研究所 「アメリカのニュータウン開発」米国外務省アーカイブ2002  
年度レポート 2003年3月 <http://www.rice.or.jp/archive/pdf/2002/j-report-usnewtown2003.pdf>. Accessed 5 Sept. 2018.

小坂井敏晶 『答えのない世界を生きる』祥伝社 2017年

ネルスン、ケアリー 「アメリカ詩の多様性」『コロンビア米文学史』吉田幸子  
訳 山口書店 1997年

西山隆行 『移民大国アメリカ』ちくま新書 2016年

岡真理 『棗椰子の木陰で— 第三世界フェミニズムと文学の力』青土社 2006  
年

鈴木透 『実験国家アメリカの履歴書— 社会・文化・歴史に見る統合と多文化  
の軌跡』慶應義塾大学出版会 2003年

## American Ideals and Roles of Writers in *Writers on America*

Osamu Yamaguchi

Soon after 9-11., many Americans asked themselves what it means to be an American. In *Writers on America*, fifteen writers answered the question. They refer to various American values such as freedom, diversity, democracy, etc. While America seems to be deeply divided with the advent of President Donald Trump, it is important to reaffirm what the American ideals are through this book. This paper shows how the writers in *Writers on America* think about their American ideals, and how they view the role of an American writer.

Elmaz Abinader, an Arabian, and Julia Alvarez, a Dominican, write stories about “inside the door,” that is, the stories based on their own cultural backgrounds. By doing so, they try to open the door of their cultures, and make Americans who have American mainstream cultural values, such as WASP values, understand them. Sven Birkerts, a Latvian, and Michael Chabon, a Jewish, realize the model of American life they adored in their childhood was based on WASP values, but that they are only a type of values. They emphasize the importance of dreaming, and try to seek their “terra incognita” in their works. Mark Jacobs, who has experienced many different cultures, gives emphasis to the importance of knowing other cultures and accepting a wide range of values. In this sense, “writing inside the door,” like Abinader and Alvarez, is one of the

important roles of writers.

Most of the writers in this book indicate that to make America an ideal place for all people, it is important to know each other well and understand various values. To do so, they try to write America as an American writer.

# フランス語小話 —ジュネーヴ在勤時代のフランス語学習奮闘記—<sup>1</sup>

多 賀 敏 行

## 1. はじめに

フランス語に対しては以前よりコンプレックスを抱いていた。大学時代に第2外国語として2年間勉強したが、ものにならず、悔しくて、外務省に入省後、英国に留学した時も、夏休みには南仏の大学の外国人向け夏期講座に出席し、フランス語を勉強した。航空運賃、授業料、生活費、さらに地元レストランでの食事代などを合わせたら、200万円位は確実に使っている。にもかかわらず覚えた単語の数は200語くらい、1単語あたり1万円もかかっていることになり、恥ずかしくてとても他人に大きな声で言える話ではない。いずれにせよ、私のフランス語はとうとう開花しなかった。

その後、2001年に在ジュネーヴ国際機関日本政府代表部公使に就任した私は、ジュネーヴというフランス語圏の土地に勤務できたことを奇貨として、この昔の投資の果実を回収しようと思ひ立ち、猛勉強を開始した。ところが、進歩は遅々たるもので悪戦苦闘の連続だった。何と言っても、最初に勉強した外国語が英語であるので、フランス語を勉強していてもこの英語の呪縛から解放されるのは容易ではない。同じラテン語の単語を共通の起源としている表現であっても、現代英語と現代フランス語においては、大きく意味が異なったり、基本の意味は同じでも微妙に語感が異なっていたりすることがあり、なまじ英語を多少なりとも身に着けているが故に、英語表現からフランス語表現の意味を類推してしまい、落とし穴に陥ることがあった。本稿では、そのような英語とフランス語の意味の食い違いをしみじみ感じたエピソードをいくつか

紹介するとともに、ジュネーヴ在勤時代に取り組んだフランス語学習を通して、学生時代から疑問に思っていたフランス語に関する事柄との再会や、より深く掘り下げて考察することで理解を深めることができた事柄等を、ジュネーヴでの経験と絡めながら述べる。

## 2. シャモニーでの登山のパンフレット：affluence

ジュネーヴに住むようになって、モンブラン（4,810.4m）に早く行っておこうと思った。日本人観光客が年間8万人もモンブランの麓の町シャモニーを訪れる。そんななかで、ジュネーヴに住んでいるのにモンブランに行っていないとなれば、ある種の後ろめたさを感じたりする。そこである日思い切ってシャモニーに出かけた。モンブランの頂上へは本格的な準備がないと登れないが、直ぐ手前のエギーユ・ド・ミディ（3,842m）という山にはシャモニーからロープウェイで登れるということを知った。早速切符を買ってロープウェイに乗り込み、途中で1回乗り換え、エギーユ・ド・ミディの頂上のある駅まで行った。すばらしい眺めで感動したが、空気が薄いせい、そして若くなくなったせい、駅に着いてそれに繋がる山小屋の中の階段を20段ほど上り下りしただけなのにぐったりと疲れてしまった。

さて、話は本論に入る。このエギーユ・ド・ミディのロープウェイのパンフレットを読んでいたら、エギーユ・ド・ミディへ登り、頂上にある展望台などを訪れ、その後麓に降りてくるという行程の所要時間は「2時間」と紹介してある。そしてそれに注が付いていて、affluenceの場合（en cas d'affluence）は「3時間から4時間」と書いてあった。

affluence という単語を見て、英語にも全く同じ単語があると思った。その形容詞形は affluent である。大学に入学した頃のことを思い出した。もう50年も前のことである。その頃、経済学と言えばポール・サミュエルソン教授の『経済学』（*Economics: An Introductory Analysis*）という電話帳のように厚い本（しかも上・下2巻）が教科書であった。それと並んで何冊かの副読本が

あったが、その1つにジョン・ガルブレイス教授の筆になる *The Affluent Society* という本があった。大量消費時代の到来を告げる画期的な本で『ゆたかな社会』という題で日本語訳が出版されていた。この本の影響を少しでも受けた者にとって、**affluent** という言葉に出会うと「豊かな」という意味がまず思い浮かぶのである。これから連想すると、パンフレットにある「**affluence** の場合」とは「豊かな場合」ということになる。しかしそれでは意味が通らない。あきらめて **affluence** を仏和辞典で引いてみると、以下のように書かれていた。

**affluence** 〔女〕 雑踏、混雑

**heures d'affluence** ラッシュ・アワー、

**affluence des spectateurs** ごったがえす観客

フランス語で **affluence** とは専ら「人がいっぱいやって来て混雑すること」を意味するのだ。社会の「豊かさ」とはどうやら関係がないらしい。つまり、パンフレットは「人がいっぱい押し寄せる時間帯や時期には、エギーユ・ド・ミディの頂上へロープウェイで往復するには3時間から4時間はみた方が良い」と言っていたのである。

英語の **affluence** もフランス語の **affluence** もラテン語の **affluere** (一気に流れる) から由来するが、英語では物全般、もしくは財や富の大量流入を連想させるのに対して、フランス語では人々の集中を意味するというように、それぞれ意味の特化が起きて、このように意味が離れてしまったようである。

### 3. 9.11テロ事件の報道をめぐる : **avertissement, enquête, prétendre**

私のジュネーヴ在勤中の2001年9月11日、アメリカで同時多発テロ事件が起きた。当然のことながら、ヨーロッパでも連日その大事件のニュースが、新聞やテレビで報道されていた。ある日、寝転んでフランスのテレビ局のニュー

スを見ていたら、アナウンサーが「ブッシュ大統領がアフガニスタンのタリバン政権にウサマ・ビン・ラディン氏の身柄を引き渡すよう要求し、引き渡さない場合には報復を行うとのアヴェルティスマン (avertissement) を与えた」と言っていた。avertissement と聞いて英語の advertisement を思い出し、「宣伝」の意味を思い浮かべたが、直ぐに「報復を行う」ということが「宣伝」の中身とはいかにも変だと気が付いた。辞書を調べてみて avertissement とは「警告」の意味であると知り、合点がいった。

英語の advertise は、15世紀初めの古フランス語 advertir (大衆に(注意を)向けさせる) に由来する。古フランス語の advertir はラテン語の advertere (注意を払う) から来ており、その後、d が落ちて avertir (知らせる、警告する) となった。英語で「宣伝する」という意味で用いるようになったのは18世紀に入ってからのものである。

10月2日の『ル・モンド』(*Le Monde*) 紙の第1面の最初の記事の見出しに「テロ攻撃：アンケートはヨーロッパに集中」と書いてあった。「アンケートがヨーロッパに集中する」とはいったいどういう意味なのだろうかと思った。そもそもこんな時期にアンケートとはちょっと悠長過ぎるのではないか。ヨーロッパの各国の市民にいったい何をアンケートしようというのだろう。狐に摘ままれた気持ちで本文を読んでみた。「FBIは、ヨーロッパが9月11日のテロ攻撃の準備の中心地であったと判断している」とあった。これを読んで「あっ」と思った。最初に出てきたアンケート (enquête) とは、事件の「捜査」のことだったのだ。つまり見出しは「テロ攻撃：その(犯人たちの足取りについての) 捜査はヨーロッパに集中する」と解釈すべきだったと悟った。辞書を調べると、enquête とは日本語でいうアンケートの意味でも使われるが、多くの場合はこのように「犯罪捜査」の意味で使われるようだ。元々ラテン語の inquirere (尋ねる) に由来する語である。英語には古フランス語経由で14世紀頃入ってきて、inquire として現在も用いられているが、アンケートの意味ではフランス語起源の questionnaire が用いられている。

ウサマ・ビン・ラディンの兄の妻、つまり義理の姉がジュネーヴに住んでいて、その女性が地元紙の『トリビュンヌ・ドゥ・ジュネーヴ』(*Tribune de Genève*) のインタビューに応じた。その記事の見出しには「ウサマ・ビン・ラディンの義理の姉 (*la belle-sœur*) が初めて心の内を明かす」と書いてあった。その記事によるとウサマ・ビン・ラディンには何と53人の兄弟姉妹がおり(兄弟が23人、姉妹が30人)、このインタビューに応じた女性のご主人(別居中)がこの兄弟の一人で今年になってスイス国籍を取得しているとのこと、そしてウサマ・ビン・ラディンとはかねてより縁を切っているとのことである。この記事によれば、この女性がインタビューに応じた最大の理由は大学生の長女がニューヨークに留学していたが、アメリカの新聞に「9月11日にはニューヨークのアパートから謎のように消えていた」と書かれたので、それが事実と違うことをはっきりと述べたいという気持ちに駆られたからだとのことである。彼女は「娘は昨年コロンビア大学で法学修士号を取得した後、研修コースを取るために引き続きニューヨークのアパートに住んでいた。そして娘がニューヨークに住んでいたのはこのように正当な理由があり、滞在は合法的なものだった。今年の夏は家族と一緒に過ごすためにジュネーヴにやって来ていた。ジュネーヴに住んでいるうちに9月11日を迎え、例のテロ事件が起きた」、「したがってアメリカのいくつかの新聞が『娘が(9月11日のテロ攻撃をあたかも察知しそれを避けるように)謎のように消えてしまった』と *prétendre* しているが、これは全く事実ではない。」と述べている。

さて、ここで問題は *prétendre* という単語の意味である。英語の *pretend* は「～の振りを装う」という意味であるが、これを前述の文に当てはめると意味が通らない。どうしてだろう。おそらくフランス語では別の意味で使われているのだろうと勘を働かせてみる。そして辞書を引いてみる。正解である。フランス語の *prétendre* は「強く主張する」という意味であると出ている。この *prétendre* の意味を正しく押さえないと、前述の文の意味は全く把握できないことになる。なまじ語源を共有し、したがって綴りも殆ど同じである

単語が英語にあるために、その英語の呪縛にとらわれ、足をすくわれかねない、実に危ない単語と言えよう。prétendre はラテン語の praetendere (主張する) に由来する。そして、古フランス語の prétendre が英語に入ったとされる。15世紀には英語において「～の振りを装う」という意味で用いられ始めたということで、この単語に関しては、フランス語のほうが元のラテン語の意味を保っていると言えよう。

ところで、「義理の姉(妹)」は belle-sœur というが、その女性が実際に身体的に美しくない場合でもそう言うのだろうかという、受け取りようによっては女性差別主義的発言と糾弾されかねない危険な質問ではあるが、言語学的社会的には根源的とも言える疑問を、職場のフランス人に聞いてみたら答えはイエス(というか Oui) だった。自分たちの家族の一員になろうと嫁いで来る人なのだから、きっと気持ちの優しい、心の美しい人に違いないと推察される。その推察から、つまり心の面に着目して、belle (美しい) という表現が使われるようになったとのことである。この説明はそれなりに説得力があると思われるが、如何であろうか。

#### 4. ある有名歌手の2年ぶりのステージ : anniversaire、public、interpréter

フランス語の anniversaire は英語の anniversary と似ているので意味も同じと思いがちである。ところが、実際には微妙なずれがあるので要注意である。少し詳しく見てみたい。まず、英語の anniversary とは(毎年の)記念日のことを指す。例えば、a wedding anniversary は「結婚記念日」であり、celebrate the 200th anniversary of American Independence は「アメリカ独立200周年記念日を祝う」という意味である。一方、フランス語の anniversaire の意味は先ず第一に「誕生日」のことを指すのである。anniversaire が修飾語なしに出てくる時は「誕生日」の意味と思って間違いない。英語の anniversary と同じように、毎年 of 記念日 という意味でも用いられるが、この場合は裸で anniversaire が出てくるわけではなく、これを修飾する言葉が前か後ろに必

ず付くので間違えることはない。例えば *le vingt-cinquième anniversaire de notre mariage* 「我々の結婚25周年記念日」、*les deux centième anniversaire de la Révolution française* 「フランス革命200周年」という風に使われる。

私はフランス語の **public** という単語は当然英語の **public** と同じ意味と思ひ込み、何も疑念を抱くことはなかった。ところがフランス語の **public** が英語のそれとはほんの少し意味がずれて使われるケースがあることに気が付いた。私の好きなシャルル・アズナヴール (Charles Aznavour : フランスのシンガーソングライター) の CD の中に “*Je m’voyais déjà*” (「私は既に成功する自分の姿を思い浮かべていた」という意味) というタイトルの楽曲がある。この曲はなかなか軽快なリズムで、フランス語の詩も良く出来ていて、そして何と言っても聴いていて耳に心地よい。その歌詞の内容はアズナヴールの自伝的内容とも言うべきもので、「自分は18歳の時故郷を後にして、パリに向かった。心は軽く、パリで成功を収める自信に満ちていた」という言葉で始まる。ところがいろいろ芸能活動を試みたが、泣かず飛ばずでパツとしなかったという趣旨の言葉が続き、このようなフレーズが出て来る。

私は陰から抜け出そうとしてあらゆることをやってみた。愛の歌を歌ったり、コミックやファンタジーの歌も歌った。でも全て上手く行かず、依然陰の中に留まった。でも悪いのは私ではなく、何も理解しようとしな**public**こそが悪いのだ (*Ce n’est pas ma faute mais celle du public qui n’a rien compris*)。

**public** とは「公衆、大衆」の意味と考えてみたが、少しその指示対象を絞り切れていないような気がした。**public** を仏和辞典で調べてみたら、第1番目に「公衆、大衆、一般の人々」という意味が書かれていたが、第2番目に「聴衆、観客、視聴者、読者」という意味が出ていた。そして例文として次の文が出ていた。

Le public applaudit le jeune pianiste.

(聴衆はその若いピアニストに拍手を送る。)

Il a son public.

(彼には読者 (聴衆) がついている。)

アズナヴァールの歌に出てくる **public** の意味はまさに「聴衆」であったのだ。つまり、「悪いのは自分ではなく、何も理解しない聴衆が悪いのだ」という意味になるのである。フランス語は、ラテン語をルーツとして、現代に至るまで長い歴史を経てきた言語である。そのなかで単語の意味が細分化し、その結果、意味の特殊化、語の多義化が起こっていると考えられる。

フランス語の **interpréter** は英語の **interpret** からの連想で「(外国語を) 通訳する」あるいは「(～の意味に) 解釈する」という意味だと推察したくなるが、そうすると間違ふことになるので要注意である。『トリビュヌ・ドゥ・ジュネーヴ』(3月11日付) の映画欄でドミニク・サンダ (Dominique Sanda) という女優を紹介する記事を見かけた。ドミニク・サンダとは、私が40年程前フランスに少しの間暮らしていた頃既に有名になっていた女優で、少々もの悲しい感じのする美しい女優で、私はその映画をよく見たものである。『トリビュヌ・ドゥ・ジュネーヴ』のその紹介記事にこのような文があった。

1976年に彼女は **le Prix d'interprétation à Cannes** を受賞して、その結果、現代の映画界で不動の地位を確立した。

さて、**le Prix d'interprétation à Cannes** とは何だろう。「カンヌ映画祭通訳賞」、あるいは「カンヌ映画祭解釈賞」ではなく、実は「カンヌ映画祭主演(女優)賞」のことである。フランス語の **interpréter** には確かに「解釈する」という意味もあるが、第2番目に「演じる、演奏する」という意味があるからである。一方、英語の辞書で **interpret** を引くと、第1番目に「解釈する」、第2番目に「通訳する」とあり、やっと第3番目に「(自己の感覚・解釈で)

～を演ずる、演奏（演出）する、表現する」と出てくる。しかし、「自己の感覚・解釈で」という但し書きが示すように、あくまで「役や曲や作品全体を自己の中で解釈し、昇華すること」がベースとなった役作りや演奏を指すようである。

さて本節ではここまで、フランス語の *anniversaire*、*public*、*interprétation* の意味を見てきたが、それらを理解すると次の仏文がよく分かるようになる。セリーヌ・ディオーン（Céline Dion）という歌手をご存じの方は多いと思う。彼女はフランス系カナダ人で7オクターブの音域を持つという。おそらく現在、世界中で最も上手な歌手のひとりではないかと思われる。特に、映画 *The Titanic* のテーマ曲 “My Heart Will Go On” は1997年アカデミー歌曲賞を受賞し、グラミー賞でも最優秀レコード賞など多数の賞を獲得した。ところが、その人気絶頂期の1999年、彼女は自身の出産とガンを患っていた夫の看病のために歌手活動を休止するのである。そして、2年余りの月日が流れ、その天才歌手が2002年3月にステージに復帰したのである。3月30日 FT1テレビでその様子が放映されたが、そのテレビ番組の紹介記事の一部を以下に紹介する。

Après deux ans d'absence, la chanteuse d'origine canadienne retrouve son public le même jour de son anniversaire. Pour l'occasion elle interprète de nombreux duo avec des stars de la chanson.

（下線は筆者）

この仏文の意味は、「2年の休みの後、このカナダ出身の歌手はちょうど自分の誕生日でもあるこの日にファンたちに再会する。この機会に彼女はシャンソン界のスターたちと数多くのデュエット曲を歌う。」となる。尚、この歌手は、18歳の時にスイスのローザンヌ近くのモルジュに住んでいて、その資格でもってスイス代表としてユーロヴィジョン・ソング・コンテストに参加し、優勝したということである。そういう意味でスイス（仏語圏）とは浅からぬ関

係があるようだ。

## 5. Bonjour と Bonne journée

郊外のホテルに長期滞在していた時のことである。朝ホテルを出ようとして部屋の鍵をフロントで従業員に渡そうとする。目が合っただけで従業員が私に **Bonjour!** と言う。こちらも **Bonjour!** と答える。鍵を受け取った後、従業員は私に **Bonne journée!** と言う。私は **Merci.** と答えて出口に向かう。こんなやり取りを毎朝繰り返した。

夕方もほぼ同じことである。ホテルの入口から中に入り、フロントに行く。従業員と私がほぼ同時に **Bonsoir!** と言う。私が **Ma clef, s'il vous plait.** (私の鍵をください) と言う。従業員は私の鍵を見つけて私に鍵を渡してくれる。その時、彼は **Bonne soirée.** と言う。私は受け取りながら **Merci.** と答える。

人と会った時、朝であれば **Bonjour.** (夜であれば **Bonsoir.**) と言う。そのように挨拶し合った2人が数秒後に別れる時に、今度は **Bonne journée.** (**Bonne soirée.**) と言うのである。わずかに数秒の違いで挨拶の言葉が **Bonjour.** から **Bonne journée.** に (**Bonsoir.** から **Bonne soirée.** に) 変わるのである。

**Bonjour (Bonsoir)** は「私はおまえという人間が今、私の目の前にいる」ということを認識したと相手に伝えるのが目的の挨拶である。視線は現在という瞬間に注がれている。これに対し、**Bonne journée. (Bonne soirée.)** とは、これから何時間か相手が活動する時間があると推察される場合、その数時間をどうぞ楽しくお過ごしくださいという意味である。視線が将来に向かっていく。

フランス語には「日」を表す **jour** と **journée**、「晩」を表す **soir** と **soirée** のペアだけでなく、「年」を表す **an** と **année**、「朝」を表す **matin** と **matinée** 等のペアがある。それぞれのペアの使い分けを、敢えて感覚的に分かり易い説明をするなら、それぞれのペアの前者は点を表し、ある一定の切り取った時間を意味しているのに対して、後者は線を表し、即ち時間の流れの続いた幅のあ

る時間帯を指すと理解すればよい。そして、各ペアの前者は全て男性名詞であるので、「良い」を表す **bon** の男性形 **bon** が付き、一方各ペアの后者は全て女性名詞であるので **bonne** が付くことになる。

挨拶の言葉を間違えて、やや深刻な事態に陥ることがある。日本のある要人の夫人がとあるフランス語圏の国の迎賓館に泊まった。ご主人の外交的活動のお供でその国にやって来たのである。夫人が晩餐会を終えて自分の部屋に戻った。ご主人の方は別の用事がある、夫人だけが一足先に自分の部屋に引き上げて来たのである。

部屋の入口近くの廊下で、夫人のお世話係としての役目を言いつかったメイド頭のジョゼフィーヌが笑顔で出迎えた。真夜中に近かったので夫人は **Bonne nuit.** と挨拶をした。ところがこの言葉にジョゼフィーヌは戸惑った。というのはこのメイド頭は、何か用事があるのに違いないと思い、控えていただけに、夫人からの **Bonne nuit.** という言葉を聞いて、夫人から「もう用事はないので早く下がるように。自分は早く床につきたい。」と言われたと解釈したからである。「私は本当に何も用事をしなくて良いのだろうか。」と独り言を言いながら、いささか不満そうな顔をして引き上げてしまったというのである。

夫人はかつて日本の大学で、夕方から夜の半ばまでの挨拶の言葉は **Bonsoir.**、夜が更けて深夜に近くなると **Bonne nuit.** と言うと、機械的に教えられていたので、その時は深夜に近い時間帯だったことから迷わず **Bonne nuit.** と言ってしまったのである。勿論、メイド頭のジョゼフィーヌを即刻部屋から追い払おうなどという意図は全くなかった。実際夫人もジョゼフィーヌが余りにさっさと引き上げて行ったのに内心びっくりしたくらいであった。**Bonne nuit.** の正しい用法を知らないことから生じた誠に残念な誤解と言うしかない。

因みに、**nuit** (夜) は女性名詞で、それに対応する男性名詞は無い。つまり上記の **jour** と **journée** のペアのような男性名詞と女性名詞のペアを作ることができないのである。**nuit** に対応する男性名詞が無いということは、時間上の

点を指すことができず、ということも取りも直さず「人と出会った時」という時の流れのある一点を表して挨拶をすることができないことになる。挨拶としては *Bonne nuit*. しかなく、その意味は「この後の幅のある時間を楽しく安らかに過ごしてください」ということ、すなわち「おやすみなさい」ということになるのである。

## 6. 『星の王子さま』: *apprivoiser*

2001年の12月上旬、私は職場に近いプティサコネの郵便局の中で列に並んで自分の順番を待っていた。日本の家族にクリスマスのプレゼントを送るためである。列の途中に棚が立てかけてあって、そこに郵便局が行っている各種のサービスを紹介するパンフレットが何種類か並んでいた。興味を持った人は持ち帰って良いことになっているようだ。見るとはなしに見ていたら、その中に“*Apprivoisez l’euro, en pieces et en billets*”というタイトルのパンフレットがあった。1部を手にとってパラパラと眺めてみた。2002年1月1日からのヨーロッパの単一通貨「ユーロ」の流通開始に備えて国民を啓蒙する各種の情報が記述されていた。(もっとも、スイスはEUに入っていないので、ユーロは自国では流通しないのだが、何せ大国フランスと隣り合わせているので、全く無関係という訳にはいかないのだろう。)

ところで、私にとってはユーロは取り敢えずどうでも良いのである。このパンフレットを手にとったのは、タイトルの最初の単語 *apprivoisez* に惹かれたからに他ならない。*apprivoiser* とは、今から50年程前、大学に入って第2外国語として初めてフランス語を勉強し始めた頃遭遇した思い出深い単語である。それ以来全く目にする事のなかった懐かしい単語である。

私が大学生の頃フランス語を勉強する学生の多くはサン＝テグジュペリ (*Antoine de Saint-Exupéry*) の『星の王子さま』(*Le Petit Prince*) を読んでいた。絵がたくさん入っていて子どもの本だなあと思いつつも、私も辞書を引きつつ一生懸命読んだ。なるほどロマンティックな童話であるが、何やら大人

にも当てはまる教訓が一杯隠されているような気がして油断できない本だと思った。この本の後半部分で星の王子さまがひとりぼっちで寂しい狐に会う場面がある。狐は星の王子さまに、「私は寂しくて退屈であるので私のことを *apprivoiser* して欲しい」と頼むのである。王子さまは *apprivoiser* とは一体どういう意味かと狐に聞く。狐は *apprivoiser* とは「何かの関係をつくること (*créer des liens*)」だと答える。そして「あなたは私を *apprivoiser* したら、他に似たような狐がいても私のことだけが気にかかるようになる。本当のことは眼では見えない。心でしか見えない。このことは何かを *apprivoiser* した人だけに分かる真実だ」と言う。*apprivoiser* とは何やらロマンティックでかつ深淵な意味を持つ言葉のようである。もし試験で『星の王子さま』を1つの単語で要約せよという問題が出されたら、私は迷うことなく *apprivoiser* と書いたであろう。そんな重要な言葉であるのだ。敢えて訳語を見つけて書き出すというようなことは畏れ多くてとても出来ない、そもそもそんな気にさえならない、それほど神聖な感じの言葉だった。

そんな言葉であるので、少しも神聖でないプティサコネの郵便局の棚にあるパンフレットのタイトルにその姿を見つけ、戸惑ってしまった。*apprivoisez l'euro* とはどういう意味なのだろう。

まるで禁を破るような後ろめたさを感じながら、恐る恐る *apprivoiser* を仏和辞典で調べてみた。

## *apprivoiser*

1. 飼い慣らす ～ *un animal*
2. (人)を従順にする、手なずける ～ *un enfant difficile*

とあった。何のことはない。*Apprivoisez l'euro, en pieces et en billets.* とは要するに1月1日からユーロが流通を開始するので、「硬貨と紙幣の双方でユーロを上手く手なずける、ユーロに慣れろ」というだけの意味ではないか。

第4節で **public** という語について述べた際に、フランス語はラテン語から繋がる長い歴史を経てきた中で単語の意味が多義化していったと考えられると考察したが、ここでも同様のことが言えるのではないか。辞書には上記の意味しか記載されていないが、**apprivoiser** という語は「飼い慣らす、手なずける」という意味から発して、「関わる」、「馴染む」、「慣れ親しむ」、「仲良くなる」、「絆を結ぶ」というように、コンテクストによって、状況によって、あるいは、使用する人の気持ちによって、関連するさまざまな意味を表すことができ、そのことこそがフランス語の大きな特徴と言えるのではないだろうか。いずれにせよ、**apprivoiser** という語に魅せられて30年。やっと再会できたと思ったら、30年来の夢破れ、以下のように思ったものである。

『星の王子さま』の中で **apprivoiser** という単語が帯びていたロマンティックかつ不思議かつ深淵なオーラのようなものは一体どこへ消えてしまったのだろうか。ユーロを手なずければ「眼」ではなく「心」で1ユーロ硬貨が見えるだけでもいうのだろうか。『星の王子さま』の中の **apprivoiser** には確実に哲学的な人生の生き方にかかわる大切な要素が含まれていた。30年ぶりに再会したと思ったら、こともあろうに世俗の極めつけとも言える貨幣と一緒に同じセンチンスに出てくるなんて一体どういう了見なのだろうか。

私は一瞬頭の中で、過ぎ去った青春を懐かしむシャルル・アズナヴールのシャンソン“Hier encore”が流れ出し、それを聴いているような錯覚に陥った。

#### 注

- 1 本稿は、ジュネーヴ日本倶楽部編集『BONJOUR! れまん』2002年9月号～2003年2月号に連載された記事に大幅な加筆修正を施し再編集したものである。

参考文献

天羽均 他(編)(2001)『クラウン仏和辞典』第5版 三省堂:東京.

Hoad, T. F. (ed.) (1993) *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology*.  
Oxford University Press: Oxford.

Picoche, Jacqueline (2009) *Dictionnaire d'étymologie du français*.  
Dictionnaires Le Robert: Paris.

## Some Episodes on a Struggle to Learn the French Language

Toshiyuki Taga

Based on his experience of having lived in Geneva, a city in the French-speaking part of Switzerland, the author introduces some French words whose spellings are identical or very similar to their English counterparts but whose meanings are sometimes totally different as is the case of the French word “avertissement,” which means “warning” and not “advertisement.” Such words or faux amis (false friends) are dangerous and could be the cause of serious misunderstanding.

## 大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
  2. 研究会、講演会および討論会の開催
  3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
  2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
  2. 副 会 長 1名
  3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。  
副会長は会長が会員の中から委嘱する。  
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。  
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

#### 附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

## 大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
  - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
  - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。
 

ワードプロセッサー使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

和文フォントとして「MS 明朝」、欧文フォントとして「Century」を使用する。

外国語文の場合は A4 判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 投稿論文の掲載の可否は、2名の査読者による査読結果に基づき編集委員会が判断する。
6. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。
 

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、平成30年10月1日から適用する。

以 上

## 大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)
7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は3校までとし朱筆のこと。3校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでとくに注意されたい。
  - ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。
  - イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。
11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以上

## 執筆者紹介（掲載順）

山 口 修 経済学部 准教授

多 賀 敏 行 外国語学部 教授

## 編集後記

本号の山口論文は、混沌たる社会に対して文学や作家が担う役割とは何かについて問うている。読んでいて、カズオ・イシグロ氏の言葉を思い出した。昨年ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロ氏は受賞の記念スピーチで、初めて「ノーベル賞」という言葉を母親から教わった時のことをこう語っている。

*The Nobel Sho, she said, was to promote heiwa – meaning peace or harmony.*

その時カズオ少年は5歳。彼が住んでいた長崎が原爆によって壊滅的な被害を受けたのは僅かその14年前のことであった。そして、21世紀の今、私たちは再び憎しみと分断の世界に向かいつつある。ノーベル賞というのはこんな時こそ私たちを平和へと導いてくれるものであると、イシグロ氏は次のように続ける。

Like literature, my own field, the Nobel Prize is an idea that, in times like these, helps us to think beyond our dividing walls, that reminds us of what we must struggle for together as human beings.（下線は著者）

そしてそのノーベル賞の持つ平和への力は「私の分野である文学と同様」なのである。

テクノロジーの発達で世界はますます接近しボーダレスになった。しかしその反面、異なる集団間の摩擦や緊張が増大している。偏見、ヘイトスピーチ、排他主義、テロの危機が広がる今こそ、文学やことばの力で、他者に共感できる心豊かな人間性を育み、分断の壁を取り除く道を探ることに繋がればと心から思う。

(Y.K.)



---

大阪学院大学外国語学会役員

---

会 長 川本 裕未

副 会 長 吉村 京子

編集・庶務委員 黒宮公彦・笹間史子・安富由季子・山口 修

大阪学院大学外国語論集 第76号

平成30年12月20日 印刷 編集発行所 大阪学院大学外国語学会  
平成30年12月31日 発行 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号  
電話 (06) 6381-8434 (代)  
発行人 川本 裕未  
印刷所 大枝印刷株式会社  
吹田市元町28番7号  
電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 76

American Ideals and Roles of Writers in *Writers on America*  
..... Osamu Yamaguchi 1

Research Note  
Some Episodes on a Struggle to Learn the French Language  
..... Toshiyuki Taga 23

December 2018

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY  
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY